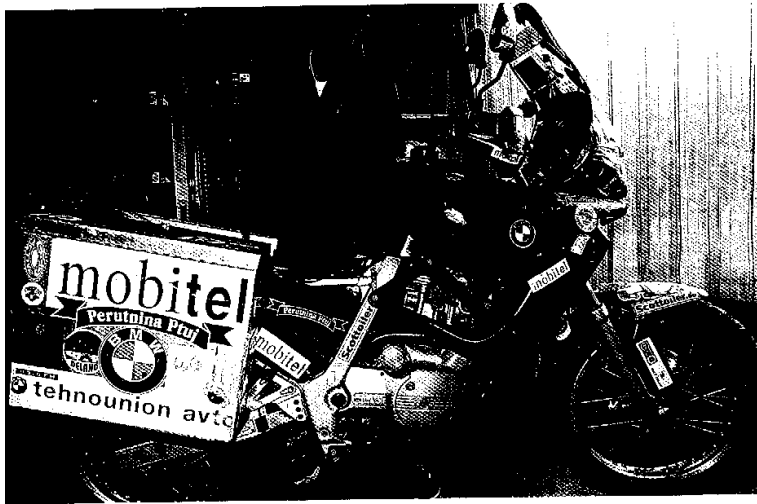
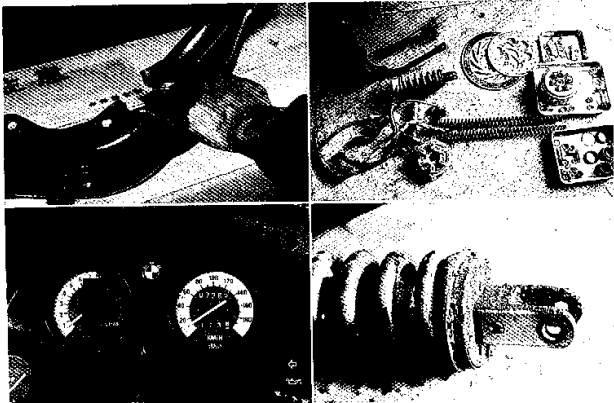


F650



フラットの工場に入ったベンカさんのF650。長旅の疲れか車体のあちこちらに見える。

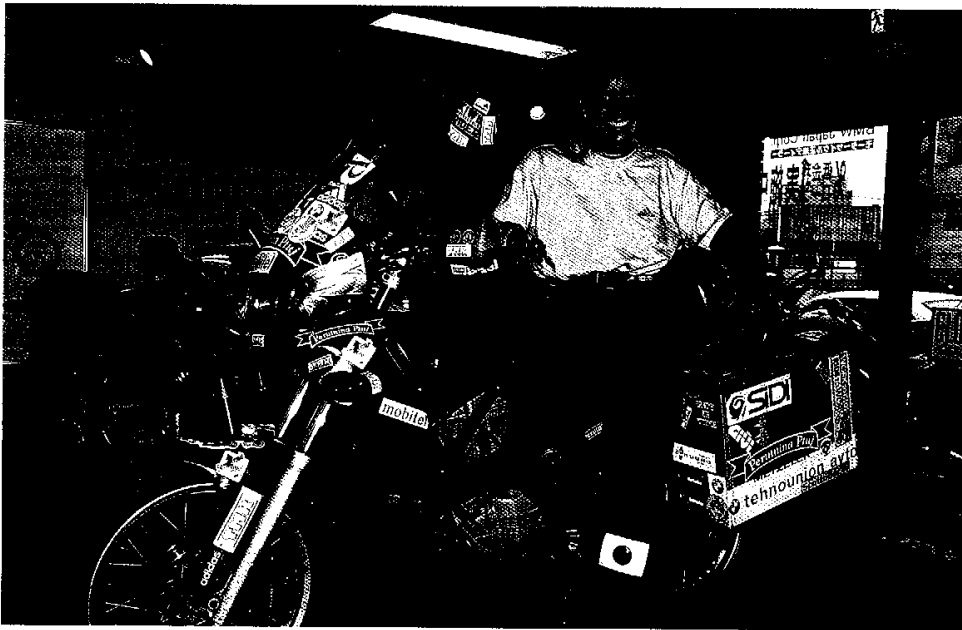


右上の写真は今回交換したパーツ類。金属疲労で折れていたサブフレームはもちろん、クラッチ板や前後のブレーキローター、フロントサスペンションのインナーコイルスプリングなど。リヤサスペンションも完全に抜けてオイルが飛散していた。今回の旅に出发してからの走行距離は10万8000kmだが、このバイクでの総走行距離は207265km!!



日本の清涼飲料のキャラクターがお気に入りなので、ノベルティのステッカーがあちこちに貼ってあった。右の写真は日本の職人さんに造ってもらったというひざ当て。

F650



ベルナルダ・ベンカ・ブルコさん。スロベニア共和国の出身。とても活発な印象のベンカさん。これまでの旅の感想を聞こうかと思ったのだが、彼女の顔がすべてを物語っているように感じた。車体に貼ってあるステッカーは彼女をサポートしている各スポンサーのもの。旅先で手に入れたもの。もちろん、このBMW BIKESのステッカーも貼らせていただきました。システムヘルメットは厚みが振りやすいのでお気に入りとのこと。

バイクで世界を一周する。バイク乗り、いやビーマーなら一度は夢見る旅ではないだろうか？ 仲間とのバイク談義の中でも時々、夢ののびとつとしてこんな話題があがる。「でも、時間がないよね。」「仕事をやめる覚悟じゃなきゃね。」「みんな、その夢を思い留まっている理由は様々だよ。」「僕自身、いつかは」と頭の片隅で夢見ているのだが、その思いに行動力が伴わないのが現状だ。

母国のスロベニア共和国ではフリーのジャーナリストとしても活躍していたベルナルダ・ベンカ・ブルコさん。

1997の6月、30才の誕生日の直後彼女は愛車のF650に30kg以上の荷物をくくりつけて故郷を旅立った。それからアメリカ合衆国、カナダ、南アメリカ、ニュージーランド、オーストラリア等を駆け抜けて、初めてのアジア圏の訪問先として、日本を選んだ。

旅の途中では「日本ではベトナムに比べると動物も食べました」というベンカさんが、相葉さんが好物だという。スロベニアに居た頃から「吉本ばなな」の木が大好きだったそうで、日本に来るのを楽しみにしていたらしい。

計算すると彼女は2000年の6月でまるまる3年も旅をしていることになる。その期間にスケールの大きさを感じたのだが、母国に戻った後のことが心配じゃありませんか？ という質問に対して彼女は「瞬不思議そうな顔をしたあと、笑い

VARIETY 1

text&photo / Tamujin / UJIMOTO

F650で世界一周

スロベニア出身のベンカ・ブルコさん 彼女の旅の目的は？

今回の彼女の旅をサポートしているのはBMWスロベニア他42社のスポンサー。後ろに見えるのは彼女いわく「my red boyfriend」。右下の写真はベンカさんの「恋人」の様子を見るフラットの柳沢社長。ベンカさんも、ちょっと不安げ。



ながらこう答えてくれた「今の旅の方が日常の生活とは比較にならないほどの訓練があるし、今は、その訓練を楽しんで乗り越える方法も身につけたから何も心配はしてません。その答えを聞いて、自分の愚問に思わず笑ってしまった。

彼女が今回、旅の相棒に選んだこのF650にも彼女なりの旅を楽しく快適にする工夫が凝らされていて、グリップヒーターや、大型のフロントスクリーンなどの他にも、どこで手に入れたのか日本の清涼飲料水のキャラクターステッカーや日本のお守りなどが至る所に貼ってあり、それがとても女性らしく見えた。

そんな「赤い恋人」の修理が終わると彼女は北京にむけて旅立った。

